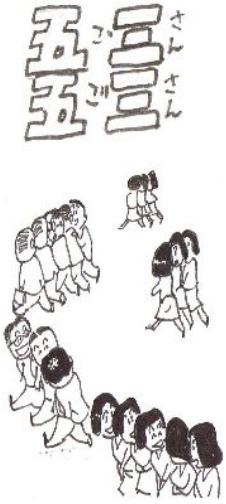


「たとえば学校が終わって帰るだろう」
「帰ります」
「だいたい3人とか5人とかがかたまって帰るだろう」
「とは限りません」
「だいたいと言っているんだ。野球の試合も終わり、観客は三三五五家路に向かったとか、クラス会のあと三三五五連れ立って二次会へ行ったとか、三三五五親しい者同士が寄り集まって立ち話をしているとか言うだろう。大雑把に言うと、3人3人5人5人がかたまって三三五五と言うんだ」
「たとえ、2人3人3人7人6人でもですか？」
「たとえ、2人3人3人7人6人でも三三五五と言うんだ」
「お言葉ですが、窓の外を見てください。あれは公民館で「上手なヘソクリの仕方」の講習会」が終わって、みんなが帰っていくところです。ほら、ママもいるでしょう」
「いるな」
「ママはお隣さんのおばさんと2人で、そのむこうでは山田くんのお母さんたち8人、その先では3人、7人、6人とかたまって立ち話をしているでしょう。三三五五じゃないでしょう」
「じつにけしからん。三三五五ヘソクリの相談をするとは」

絵と文

すぎやまチヒロ

## パワフル四字熟語

最終回

「徹頭徹尾人間？何ですかそれ」
「頭から尾まで貫き通すということだ」
「人間には尻尾はないでしょう」
「人間にたとえれば足先だ」
「そんな人間見たことないなぁ、だって歩きにくいでしょう」

「なんで？」
「だって、頭の天辺から足の先まで棒を通したら転んじゃうじゃないですか」
「たとえだよ」
「たとえにしても、棒を通すのはムリでしょう」
「棒じゃなくて芯が通っているって言ってんだよ」
「だから芯棒でしょう？」
「頭の天辺から足の先まで、つまり始めから終わりまで首尾一貫してるって意味だよ」
「そんな人いるかなぁ」
「代表的なのは、みんなに笑われてもあくまでも地球は回っていると徹頭徹尾地動説を唱えたガリレオガリレイがそれだ」
「自説を曲げない人のことを徹頭徹尾人間というんですね」
「そのとおり」
「すると、うちの両親は徹頭徹尾人間ですね」
「そのココロは？」
「だって、ママは徹頭徹尾自分の言うことを曲げないし、パパは徹頭徹尾ママの言いなりになってるでしょう」
「・・・・・・」